

Title	W・A・E・スカーニック編『アフリカの政治思想：ルムンバ、エンクルマ、トゥーレ』
Sub Title	W. A. E. Skurnik, ed., African political thought : Lumumba, Nkrumah, and Touré
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1971
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.44, No.9 (1971. 9) ,p.151- 155
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19710915-0151">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19710915-0151</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ナム戦争の処理方法のいかんによつて殆んど決定的な影響を受けるものと思われるが、その後で登場する政治的形体がどのようなものとなるかは、新しく成立するであろう連立政権（ラオスにおいては二度の失敗の経験がある）がいかんにして構成され機能するのか、そして特に左派内部において誰が民族統一戦線の真の担い手となるのか——生粋の共産主義者か否か——によつて大きく変わってくる。その点について著者は、ラオス愛国戦線内部におけるスファヌボン議長、ラオス人民党書記長（愛国戦線副議長）ケイソンに対する力の相対的下落を指摘し、中共型の「共産党の指導する民族統一戦線」に決定的に進みつつあると見ているようである。確かにカンボジアにおいても赤色クメールに対するシアヌークの相対的力の下落が伝えられているが、しかし一方では南ベトナムでも示されつつあるごとく、必ずしも共産党が指導しない民族統一戦線の持つ力の偉大さという面も再認識されつつあり、ラオスやカンボジアの将来の政局がこのソ連型統一戦線に向かう可能性も相当に残されていると見るべきではなからうか。

今一つ指摘しておきたいのは、北ベトナムとラオス左派間の密接な結びつきは正に著者の言うごとく唇齒の関係にあるが、なおラオス人の中にある伝統的反ベトナム感情は根強く、ラオス右派はもとより左派の中からも、ラオス・ナシヨナリズムの爆発という形で表明される可能性をはらんでおり、ベトナム、ラオス関係を考察する際に考慮に入れておかねばならないということである。

（松本 三郎）

W. A. E. Skurnik ed.,

*African Political Thought: Lumumba, Nkrumah, and Touré*

Denver, Colorado: University of Denver, 1968,

147pp.

W. A. E. スカーニック編

『アフリカの政治思想——ルムンバ、

エンクルマ、トゥーレ——』

本書は、現代アフリカをある意味で象徴する三人の政治指導者をとりあげ、その政治的イデオロギーを比較・検討しようとする試みである。

一般に、比較研究を試みる場合、その研究の「対象」——それは当然複数の「対象」ということになるが——のあいだに類似性と異質性が予想されるわけであるが、本書の研究対象である三人のアフリカ政治指導者についても、「ラディカル」であるという類似性と、ベルギー（ルムンバ）、イギリス（エンクルマ）、フランス（トゥーレ）という異つた宗主国の植民地支配のもとでナシヨナリズム運動を指導したという異質性を識別することができる。

おそらく本書の編者は、ルムンバ、エンクルマ、トゥーレという三人の政治指導者をもつ右のような類似性と異質性によつて「アフ

リカ」が代表されると見、それ故に「アフリカの政治思想」というタイトルを付したのである。

ところで、本書は四つの部分から構成されている。最初の部分は編者スカニニック(コロラド大学准教授・政治学)の手になる「序論」であつて、そこではこの比較研究の全体的枠組が提示され、かつこれら指導者の心理的側面に照明を当てることによつて、かれらのもつ政治理念の内容と志向性を説明しようという努力がはらわれてゐる。

第二の部分は、ルネ・ルマルシャン(フロリダ大学助教・政治学)による「ルムンバの政治思想」の分析であり、第三の部分はK・W・グランデー(ケイス・ウエスタン・リザーヴ・ユニバーシティー准教授・政治学)による「エンクルマの政治的イデオロギー」の、そして第四の部分はC・F・アンドレイン(サンディエゴ州立大学准教授・政治学)による「セク・トゥーレの政治思想」の、それぞれ解明である。

このように、比較研究とはいひながら、四つの部分がそれぞれ別の執筆者の手になるものであるために、本書は全体として見れば、擬集性にやや乏しいという印象をまぬがれない。実際、編者スカニニックの説明によれば、各部分の執筆者たちは「歴史的な力の本質と目的、政治的正統性の基盤、政策決定者の役割、個人と社会の関係」といつた伝統的な政治理論的諸関心」に注意を払うよう要求されたものの、それもあくまで「執筆者がそうした諸点に注意を払うことが可能であり、しかも適切である」と考える範囲で「

ということであり、その意味で、枠組自体についても各執筆者にかなり大幅な自由裁量の余地がのこされていたわけである。もつとも、こうしたところからくる全体的なアンバランスは、共同研究の避けがたい運命のようなものかもしれない。

ところで、本書の内容についてももう少し具体的に論点を指摘し、論評をくわえてみよう。

まず序論であるが、この部分の執筆者スカニニックは、「役割の認識」および「個人的意向」という二つの「変数」に焦点を合せることによつて、前記三人の指導者をもつ政治理念の内容と志向性をさぐるうとする。たしかに環境的諸要素を背後におしやつて、主観的・心理的諸要素から政治思想ないしイデオロギーを分析するのも一つの方法であつて、この場合、そうしたアプローチ自体の是非を論じる必要は、とくにないであろう。さらにスカニニックは、副次的な枠組として、いわゆる文化的規範が政治思想にいかに影響をあたえるか、という側面にも照明をあてている。

たしかに、こうした文化的規範は、指導者たちの役割認識と密接にからみあつていと思われ。たとえば、かれらが指導した独立運動にしても、民族自決、植民地におけるデモクラシーの達成といった西欧的価値の実現を目指したものと見ることができ、その意味では西欧的な文化的規範のなかで指導者は自己の役割認識をおこなつたといえるわけである。著者はさらに、ルムンバ、エンクルマ、トゥーレといった指導者が、広い意味での西欧的な文化的規範に影響されたことにくわえて、アフリカの伝統的な文化的

規範を模索しそれに自己の政治思想のよつてたつ基盤を求めたいという心理的傾向を強く示していることを指摘しているが、後者の点についての突込んだ分析はほとんどなされていない。

しかし、それはそれとして、著者によればナショナリズムがひとたび「独立」という「高次の」目標を達成してしまつと、これら指導者の政治思想は新しい次元といつたものに当面することから、變動を余儀なくされる。たとえば、国家建設という新しい次元におかれた場合、これら指導者は、政治的不安定の恐怖、経済的停滞と後退の恐怖、新植民地主義的侵入の恐怖、自己の指導権と理想の喪失といつた恐怖など、実にさまざまの恐怖につきうごかされて、権力集中化を強く志向し、その対極をなす多元主義を低効率のイズムとして拒否するにいたる。ここからかれらのエリート主義の論理が引きだされてくるが、このエリート主義は、人民の意志によつて国家建設を、あるいは政治発展を委任されたのだという「委任の論理」にさええられるわけである。そうして、こうした論理にさええられたエリート主義はイデオロギー的にさらにエスカレートして、指導者の「無誤謬性」をもその構成要素としてそなえるにいたる。かくて民衆の無条件の忠誠心が強くしかも当然のごとく要求され、目標価値の一つとして追求されてきたはずの「デモクラシー」は骨抜きにされて「集権主義」の単なる形容詞にしかすぎなくなる(たとへば「民主主義的中央集権制」= *democratic centralism* というタームを想起せよ)と、著者はいうのである。

こうした著者の論法は(細かい点は別として)むろん首肯しうる。

だがしかし、そうした結論は、指導者の心理的要因(この場合は役割認識)に焦点を絞らなくても、すでに多くの研究者によつて指摘されていることであらう。著者の狙いはいつたいなんだったのであるか。多くの研究者が述べていることを、別の方法をもつて確認するのが目的だったのであらうか。それならば、われわれもその程度のもので受けとつておくまでである。

スカリーニクの議論は、少くとも本書に関するかぎり、やや常識的である。そうした印象は、指導者の役割認識についての分析ばかりでなく、「個人的傾向」が政治思想にどう影響するかという論点についても拭い去ることができない。

つづいて、「ルムンバの政治思想」をあつかつたルマルシャンの論文では、毀譽褒貶はなほだしいルムンバを、非難者の観点からでも称讃者の視点からでもなく、まつたく客観的な立場からとりあげて、その政治的輪郭を構成する真の次元を設定し、それを土台として、ルムンバの実像をえがきだそうという試みがなされている。

たしかにルマルシャンのいうように、一九六〇年七月にはじまる第一次コンゴ危機があまりにもドラマティックであつたために、そのルムンバがその悲劇的なドラマの象徴的人物であつたために、かれの存在が神話のベールに覆いつくされた感じがあることは否定しえない。しかし、われわれの印象では、ルムンバ個人はかれの悲劇的な死によつて神話化されても、かれの思想までが神話化されてはいないと思う。それにもかかわらず、ルマルシャンは、この点をいささか誇大に、あるいは大げさに受けとつている。たとえば、

「独立アフリカの用語法では、ルムンバ主義はペン・アフリカニズム、ナシヨナリズム、アフリカ社会主義とおなじくらい広く通用し、かつそれらとおなじほど強い情緒的調子をもつ傾向がある」が、「実は、アフリカの政治思想に対するルムンバの貢献はむしろありきたりのものである」といつた論法はその典型であるが、実際には現代アフリカの政治的クライメートのなかでルムンバ主義（この用語ですらさほど一般性をもたないであろうが）がペン・アフリカニズム、アフリカ社会主義などと同等の情緒的重味をもつとは考えられない。もつとも、こうした「ルムンバ主義の神話」を著者自身が作りあげることによつて、その対極としての「ルムンバ主義の実体」をヨリ強く印象づけることは可能であるから、こうした著者の誇張は論文作成上のテクニクであるのかもしれない。

しかし、かりにそうした見方になつても、ルムンバの政治思想の発展過程を跡づけるルマルシャンの論法にはかなりの説得力が感じられる部分がある。著者によれば、ベルギー領コンゴの比較的穩健な開化民であつたルムンバを強烈かつ急進的なナシヨナリズム指導者に成長させたものは、結局のところ、かれの活動家的側面であつて、かれの政治思想ではなかつた。それも、かれの組織能力が卓越していたからでも戦術的マヌーバリングにたけていたからでもなく、自らをメシアの指導者して民衆の目に映じさせる高度の能力をもつていたことのゆえである。著者の場合、ルムンバのカリスマ性を高度のものと思ひすぎているくらいはあるが、全体としてとらえれば、その論旨は妥当であらう。

「エンクルマの政治的イデオロギー」をあつかつたグランディエの論文は、「この不可解な人物の政治思想を論述し、その本質と、ガーナの状況におけるその機能という角度から、かれの政治思想を分析する」ことを狙つたものである。しかしながら、この著者の場合も、エンクルマの政治思想について、とりわけユニークな分析を示しているわけではない。エンクルマ主義の根底にあるものが、「全人民の統一と協調」の神話であり、それが国家のレベルであれ、アフリカ大陸のレベルであれ、あるいはまた党のレベルであれ激しく追求された、という主張も別段珍らしくはないし、またエンクルマ主義の形成にルソー、ジェファソン、ロック、ホップス、デュボイ、ガーヴィー、ガンディー、マルクス等の思想がそれぞれ程度こそ異なれ影響をあたえたことも、とくに新しい指摘ではなからう。

ただ、エンクルマ主義は政治的武器としては失敗したが、その理論化の水準は比較的高く、またその故にエンクルマ主義は一九五〇年代から六〇年代前半にかけて、単にガーナ内部のみならず、全アフリカのラディカルなナシヨナリストたちの共有財産たりえたのだ、という著者の指摘は、心にとめておく必要がある。さらに、エンクルマ主義を評価する場合、そのイデオロギーと現実のギャップを過大に見る結果、それがもつていた積極的な面を見過してしまふような傾向があることを指摘している点は、同学の者にとつて多少とも参考になる。

最後の論文すなわちアンドレインの手になる「セク・トゥーレの政治思想」と題する論文は、本書のなかでもつともままとまつた労作

であるように思われる。著者アンドレインは、本論文より以前に「民主主義と社会主義——アフリカ指導者たちのイデオロギー——」(D・E・フター編 慶大地域研究グループ訳「イデオロギーと現代政治」昭和四三年・慶応通信・所収)という比較的大部の論文を発表し、そのなかでトゥーレのイデオロギーを詳しく論述しているが、それと本論文を比較してみても興味ぶかいは、前論文ではトゥーレのイデオロギーの体系的性格に力点をおいて論述しているのに、この論文では逆にトゥーレのイデオロギーの非体系性をクローズ・アップしようとしていることである。すなわち、本論文でのトゥーレの評価は、そのイデオログとしての面ではなく、オーガナイザーとしての面に対してあたえられているのである。曰く、「要するに、セク・トゥーレは、独創的なあるいは重要な思想家としてよりは、むしろアフリカの政治的オーガナイザーとして理解した方がよいであろう」と。かれはまたこうもいつている。「このギニアの指導者は、純理論的かつ総合的なイデオロギーをうちだしてはいないように思われる。マルクス・レーニン主義と比較してみると、トゥーレの思想はその構造において包括的ないし体系的でもなければ、その機能において総合的でもない」。

しかし、元来、理論化の水準がまだ相対的に低い現代アフリカのイデオロギーを、マルクス・レーニン主義と対比させることはいささか無暴なのであつて、トゥーレの場合、アフリカの水準からすればそのイデオロギーの体系的な比較的高度であり、しかもそれをうまわつてかれのオーガナイザーとしての能力がたかいたと見る方が

妥当であろう。

以上、興味ある論点だけをひろつて論評するといういささかバランスを失した書評になつてしまつたが、もう一度本書全体についての印象をいえば、統一的な枠組がしつかりしていないために比較研究としては必ずしも成功とはいえないし、そうかといつて個々の論文をとつてみても、スペースの関係で主題が十分に展開されていないきらいがある。むろん、なかにいくつかの示唆的な指摘を見いだすことはできるが、本書のタイトルがもつ重さをその内容が十分にささえられない感があるのは、惜しいと思う。

(小田 英郎)